仙台藩は，藩祖伊達政宗以来，海外に豪遊を示し，家臣の文倉長を遠くローマまで派遣し，海外の情報や知識に対する伊達藩の積極的な藩風は幕末まで続いており，学問や産業の面で大きな成果をもじわっている。

仙台藩は，藩祖伊達政宗以来，海外に豪遊を示し，家臣の文倉長を遠くローマまで派遣し，海外の情報や知識に対する伊達藩の積極的な藩風は幕末まで続いており，学問や産業の面で大きな成果をもじわっている。

1 仙台藩学問所 養賢堂

仙台市若林区南金沢町，旧奥州街道沿いの歴史のある街にある名刹，泰心院の山門は，かつて藩内の多くの俊才を育て学問研究の中心であった仙台藩学問所「養賢堂」の門であった。

養賢堂は学問が盛んであった時期は，長崎に出仕し蘭学を学んで帰国した大抵平が第5代学頭を務めた時である。仙台藩の蘭学は他藩と大きく異なるのは，当初からオランダのみならずロシアにも多大な関心を寄せていえることである。平泉，学頭，任後ロシア版「万国図」の翻訳を行い，さらに門弟の小野寺丹元を江戸及び長崎に送り，蘭・露両国語を学ばせ，「ロシア国史」を訳させていえる。丹元は帰藩して南北アメリカ州の地誌に関する書の著者などを行った。嘉永2年（1849）養賢堂の蘭学和尚方に任じられ，蘭学方に蘭学和尚方を設けるなど10年間にわたって仙台藩の洋学の発展を尽力した。仙台藩の洋学は，平泉の後も大槻習斎（6代学頭），大槻巖楽（7代学頭）のもとで発展した。習斎の時代の洋学教授，熱海真行の指導により西洋製築法が導入され，藩北の気仙沼に塩田が設けられた。巖楽は西洋砲術に詳しく，西洋事情に通じており，開国論者とし

2 仙台藩の製鉄

仙台市内から国道346号を気仙沼方面へ向かう，北上川を渡ると宮城県東和町，岩手県藤沢町，宮城県本吉町が入りくんの山地にさしかかる。ここは，城屋製鉄で知られる仙台藩の製鉄史上最重要な史跡が数多く点在する地域である。

明治以前の日本における製鉄の特徴は鉄鉱石ではなく砂鉱を原料とした点にある。炉の中に木炭と砂鉱を入れ，つどいで空気を送って木炭を燃やして鉄を還元する「たたら製鉄法」とよばれる方法が用いられた。たたらは踏みふさいごのことである。江戸時代におけるわが国の鉄の主力生産地は出雲を中心とする中国地方であった。安永年間（1772-1887）には高殿と呼ばれる建屋で操業
する大規模な製鉄法が完成している。一方、江戸時代の仙台藩は、礦霞製鉄とよばれる独自の製鉄技術、製鉄体勢を生みだし、江戸を中心とする東日本に「奥州の鉄」を供給していた。その品質の高さは遠く出雲にまで知られていた。

東磐井郡（現岩手県藤沢町）大龍の旧家に伝わる文書によれば、石巻地方で勢力を保っていた戦国大名、葛西氏の家臣千葉土佐なる人物が備中の国より製鉄技術を千松大八郎、小八郎兄弟を招いて製鉄を行ったのが、この地域での製鉄の始まりといわれる。一方、天正19年（1591）、葛西氏が滅び伊達領となって、旧葛西領の北上山地地方で活発に製鉄が行われており、中国地方で製鉄術を学んで帰った旧葛西家臣佐藤十郎左衛門佐渡が、慶長11年（1606）本吉郡馬籠村（現在の宮城県本吉町）で製鉄を行ったのが仙台藩での製鉄の始まりだと言う説もある。彼は、仙台藩製鉄方取締役に任命されており、以後、馬籠村の佐藤一族は、代々、藩の製鉄を取り仕切っていった。

佐藤十郎左衛門は製鉄法に改良を加え生産量を増大させ、「南蛮吹」と呼ばれる技術である。これは十郎左衛門本人または佐藤一族の誰かが伊達氏の遺策実行の一部として支倉常長に同行し海外で得てきた技術であろうと言われている（パチカン文書に常長の随員にサトーの名がある）。

寛政年間の文書によれば、鉄は磐井郡東山、気仙、本吉で多く産し、製鉄は銅（銅）屋と呼ばれる建物内で行われた。

砂鉄は、流水中での比重差により土砂と分離する、いわゆる鉄鉱穴流し法によって採集された。礦霞屋は方十間（約18 m四方）の建物で、中央に粘土で炉が築かれていた。中国地方のたたら炉は長方形であるが、仙台藩の町屋で用いられた炉は、径2間（約3.6 m）、高さ7尺（約2.1 m）の円筒型で、背に土二白い、左右に箱二白い、正面下部に銅鉄の出入口が付いている。まず、炉内で木炭を燃やし、これに砂鉄を加えた。製鉄が進むと炉の下部の口から銅鉄と鉄滓が流れ出す。3日間の連続操業の後、熟で傷んだ炉を壊し、新しいものに作り直した。

仙台藩の製鉄は、盛岡藩での鉄の大量生産が始まるにつれ次第に衰退していった。明治13年（1880）近くの釜石に最初の官営製鉄所が置かれ、溶鉄炉が稼働し始めると、たと製鉄の歴史に幕が降ろされたのである。

なお、今日、キリシタンの殉教史跡や遺品などが宮城県東和町米川から岩手県藤沢町大龍の地域に多数発見され、地域観光の目玉とされている。製鉄法を伝えたとされる千松兄弟がキリストであったため、製鉄関係者の間にキリスト教が広がり、やがて大迫害を受けるに至ったというのである。たしかに大龍を中心とする地域は仙台藩の製鉄の中心であったが、製鉄とキリシタンの関係については、産業考古学研究者の間からは疑問点が指摘されているようである。

本稿をまとめるに当たり以下の文献を参考にした。

文 献
1) 山形県, 資賢堂の沿革とその沿学の発達, 仙台地域研究, 15(11), 21(1946).
2) 藤崎 準, 仙台藩の製鉄と佐藤十郎左衛門, 金属博物館紀要, 2, 26(1977).

[連絡先] 980-77 仙台市青葉区荒巻字育英（勤務先）